

えん定例総会記念講演に参加して

『子どもの貧困 大人ができること』

今、こどもたちを取り巻く問題が連日報道機関を賑わせています。子ども6人の内1人が貧困と言われている中、私はその実態を現実として受け止められない感覚でいました。それは私自身が自分の生活環境に安住し、情報に正面から向き合っていなかったからだと思いました。今回、「あすのば」村尾さんの講演をお聞きし、子どもたちの様々な生活状況を窺い知ることが出来ました。

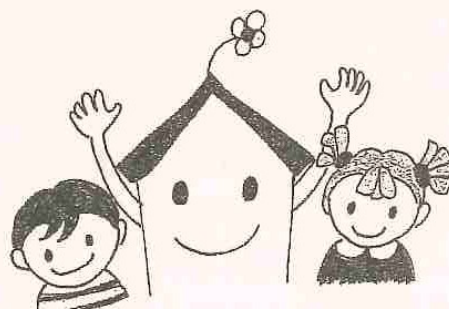
村尾さんご自身、お母様を自殺で亡くされ、お父様が定時退社等の仕事調整をし、父子家庭の生活を支えられたそうです。その仕事の仕方は会社から『会社は慈善事業ではない』旨の批判を受けたとのこと。それは正に今の社会に繋がる厳しい表現だと思いました。子どもの貧困は様々な生活困難が重なりあって起きる状態だと再認識しました。「あすのば」はその困難の具体的内容を明確にし、『入学・新生活応援給付金』として、3万円から5万円を返済不要、成績不問で子どもたちの援助に役立てているとのことでした。これは社会に対して大きなメッセージとなり、今後の飛躍になることだと思います。

日本の社会は申請制度が基になっています。自ら動き、発信しなければ様々なサービスは基本的には受けることは出来ません。児童養護施設を出た後の生活や、母子・父子家庭の直面している生活状況等どれも困難なはずですが、いわゆる「見えない貧困」となってしまうのでしょうか。当事者が困難解決に向けて援助を求めていく為には社会資源の情報を受け止め、行動するためのエネルギーが必要です。そのためにも地域連携や支え合いは様々な気付きの土台になると思います。

月一度の「だれでも食堂」に今はまだ大きな力があるとは思いませんが、楽しく食事し集える場は地味でも一つの社会への窓口になり得ると思います。

おせっかいを受け育った村尾さんは、今『おせっかえし兄さん』だそうです。

—心から拍手です—



(だれでも食堂運営スタッフ／胡桃澤良子)